

うちの  
みんな  
で  
読んでね

お念仏に出会うとき、空気も水も大地も、一木一草も  
私のために存在してくれていたのだと仰ぎ見ることができて、  
感謝の心が生まれてくるのです。

浄土真宗のお盆は、自分の善行や施し物を死者に回向するという考え方は全くありません。一般的な宗教習俗と違い、あの世にいった靈魂がお盆に還ってくるという考え方もありません。

なぜなら、念仏者はいのち終わるとともに、如来様のはたらきによってお浄土へ往生させていただくのですから、靈魂がこの世を懐かしんで還ってくるとか、亡くなった人に供養しなければ往生出来ないということはないのです。



では何のためにお盆を迎えさせていただくのでしょうか。それは、お盆と言うしきたりを通して、いのちを与えてくださったご先祖を偲び、今あるわたしのありようをしっかりと見つめさせていただくのです。

私のいのちは多くの人々から祝福され、喜びの中で誕生しました。しかし生まれたその瞬間から、まちがいなく私を育てるための母の仕事が始まっていたのです。私がすくすく、よろこびとしあわせの中で育って来たのは、母の悲しみと涙があったなればこそでした。

「その母の悲しみと涙を、しっかりといただいてくれよ、分かってくれよ、その母あればこそその、わがいのちであったことを」と、お釈迦様は「盂蘭盆経」の中で、餓鬼道に落ちねばならなかった目蓮尊者の母の姿を通してお示し下さったのです。まさに「歓喜会（かんぎえ）」という、いのちといのちが出会う大事な日です。阿弥陀様のご恩を報謝させていただき、お念仏を喜ぶ日としましょう。（出典 仏教家庭学校）

ブツダ・真理のことば（中村元訳）  
ダンマパダ第十章暴力第130番

すべての者は暴力におびえる。  
すべての（生きもの）にとって生  
命は愛しい。  
己が身にひきくらべて、殺しては  
ならぬ。殺さしめてはならぬ。

釈尊の語録を集めた原始仏典・法句経の一節。「行ない静かに、心おさまり、身をととのえて、慎みぶかく、生きとし生けるものに対して暴力を用いない人」とは凡人には難しい。しかも他人に対してもだ。しかし理想は忘れてはいけない。

## 世俗の論理の

## 行き詰まることを

## 教えるのが仏法

◆栗山師のご自坊・円徳寺（福岡県）の寺報「海」で、約四十年前に掲載された言葉です。

しばしば誤解を受けますが、仏教は私たちの思いをすぐさま実現する道具ではありません。また、世俗を巧みに生き抜く処世術でもありません。勿論、お寺に参拝し、教えに触れることで、一時

的に気分が晴れたり落ち着くことはあります。しかし、それが仏教の本質ではないでしょう。仏教の課題とは、老病死という厳しい現実の解決です。老病死は私たちが社会で築き上げてきた財産や、地位や名誉、健康を会こそぎ損ねてしまいます。残念なことに、世俗で手に入れたものは必ず失われ、安定不変の抛り所とはなりません。ところが、私たちはその頼りない現実から目をそらし、目の先の楽しみと失われる幸せばかりを追い求めているのではないのでしょうか。栗山師の寺報には

『真実は何時でも何処でも、何者にも平等に真実である。真実には必ず真実ならしむる力の動きがある。私が少しでも人間らしくなろうとすることは、真実そのものに還ろうとする相である』『還る場をもたないものは、どのようにうまく生きても最後には行き詰まり、みじめになる。還る場を持つものは、如何に苦しくとも行き詰まることなく、よろこびの中に堂々と生き抜く。それは永遠なるもの、無限なるものにつながっている』

仏教は、自分の都合や自己中心性から離れられぬ世俗の論理を明らかにし、その迷いと行き詰まりに喘ぐ私を救う教えなのです。仏法に照らした生き方を問うて行きましょう。（引用「心に響くことば」「月々のことば」）

### 教えて、お坊さん④ 「お盆って亡くなった方が戻ってくるんですか？」

しばしばそう聞かれますが、実際見たことはありません（笑）。お念仏をいただいて往生するという事は、仏になってお浄土におられるので、靈魂のようなかたちで再会することはありません。来世も再び一緒になろうとか、次は〇〇のような人になりたいと望んでも叶わない。仏という絶対的悟りの境涯ですから、もう六道輪廻しないのです。そのような物語が、亡き人にとっても自分のためにも大事だと感じ取ってはいかがでしょうか。

お盆の語源と言われる盂蘭盆経は、母と子の愛情がモチーフになっています。世間では大切な「絆」であり数々の「美談」となっても、その裏返しとも言うべき親子間の不和や愛憎劇にも事欠きません。時に節度や反省が必要と分かっている人間の間には限界があります。自分を正当化できなければ不機嫌になり、怒り、ひがみ、人の痛みを耳を閉ざす。家でも組織でも力を持てば使いたくなる、道具や技術を持てば欲も広がり、使わずとも心乱される。胸の内まで他人に裁かれたりはしません、そこをお見通しなのが仏さまです。

もうこんな負の感情にとらわれたくないといった体験を、大勢がさらけ出し合い、世間の教えでは解決しえない愚かな自分を発見し、いのちを活かす普遍的道理に目覚めたことから、深く救いのよろこびがもたらされたのが盂蘭盆経の意味合いの一つです。

是非、お墓参りやお寺参りを通して、いのちのご縁や仏法に触れていただければ何よりです。ね。（参考「仏教経典の世界」ほか）

## 「安保法案から見えてくるもの」 .....

◆今夏、国会では安保関連法案の審議が注目され、世論調査では法案反対や説明不足への不満が明らかになり、多くの若者や学生、市民や多岐に渡って学者、文化人、宗教者らの団体が、各地で反対デモや集会を催し声明を発表しています。安倍政権や与党は、安全保障環境が大きく変容したとか、抑止力を高める、積極的平和主義などと言って理由を掲げていますが、皆さんはどのようにお考えでしょうか。

11本の法案は、日本の安全が脅かされた時と国際貢献として武力（自衛隊）の使用を大きく広げるものです。確かに、島国日本としては警察の治安活動だけでは領海警備に手薄な面はあるのでしょうか。であれば、そこを充実する政策でよいはずが、法案では政府が認定さえすれば、地理的にも条件的にも具体的な制限がありません。近隣諸国からの疑念や緊張のリスクも差し置いて、そのような武力の拡大が今必要なのか、それ以前に外交的努力が十分になされてきたのか、国民全体で了解されてきたとはまず思えません。

この法案を巡っては、①そもそも紛争を解決するのに武力は行使できないにも関わらず（憲法9条）、②閣議決定で強引に解釈を変更し（権力を縛られる側が勝手に変え）、国会開催の前に米国議会で成立を約束し（立法府を無視）、③専門家や若者の意見を尊重せず、報道の自由・法的安定性・国会での質疑をないがしろにするような発言や答弁を重ね、国の大転換にあたって正々堂々とした議論が打ち出されぬまま進められています。

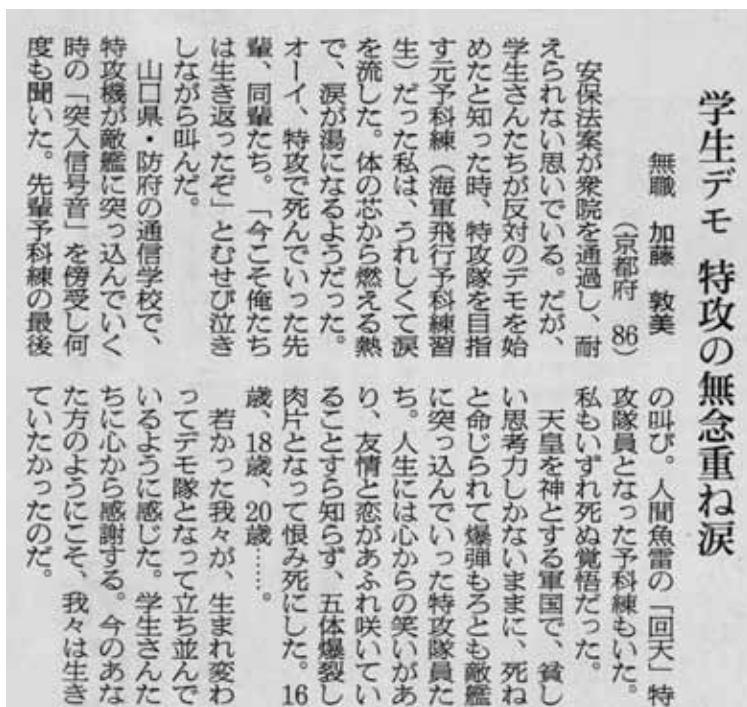
これらの流れは現政権になってから、国民の人権や自由を省いた全体主義的な憲法改正案を出し、特定秘密法も強引に成立させ、武器輸出の緩和、解釈改憲、報道圧力へと進んできた延長上にあり、多くの方がそこに不安と不信を感じているのではないのでしょうか。

◆原発再稼働にしても、TPPにしても、公約と実質反対の政策。議席数だけ得れば、支持率が激減してもなお謙虚さや誠実さが感じられぬ政治姿勢に、私たちは信頼が置けるでしょうか。もし100年に

一度だけ、私たち市民が抵抗する権利を使えらしたらまさに今がその時。

それはまた、国防というこの現実、戦争前後の歴史、米国と日本の関係に関心と注意をむけ、市民が本当の主権者としての力をつけること。

かつて、のびやかにいのちの花を開けず、過酷な傷を抱えざるを得なかったその「業」を精算することが、70年後に生きる私たちに託されているのかもしれない。少々荷は重いですが..。(S)



## 「熱闘！甲子園」

◆今年の夏も、テレビ・新聞に「猛暑、激暑、熱中症」など、暑い日本をさらに暑くするような言葉が毎日のように出ています。

昔とは暑くなった夏に合わせて、今は「クールビズスタイル」とか学校でクーラーも常識になりつつあります。しかし昔から変わらないのが夏の高校野球甲子園大会。どんなに暑くても炎天下のもと、白球を追う姿、タオルをかぶり応援する姿は変わりありません。

プロ野球には、ほとんど興味がない私も、春夏の甲子園大会にはつい見入ってしまいます。かつて小中学生の頃の私には、礼儀正しく一生懸命な高校球児は、すごく大人に見えました。球児の年齢を越えると、頑張る姿に健気さを感じ、40代に入った今は、球児を見守る親御さんの気持ちにまで感情移入...

今日も敦賀気比高校の初戦を見ておりま



した。両チーム一步も譲らぬ緊張感のある試合でしたが、不思議なもので、勝ってほしいと敦賀気比を応援するものの、勝ちが見えると、今度は相手の投手や監督が気の毒になってくるのです。

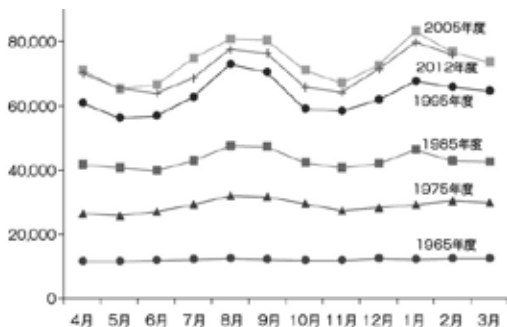
勝った者だけでなく負けた者も美しい...。互いが全力を掛けた試合に感動し、試合を見終わった頃には、暑さでだら~っとなっていた気持ちが、きりっと正されたような気分になりました。毎年夏の楽しみです。(C)

## 震災後、新基準で初、川内原発再稼働！

猛暑もどこやら、夏の節電キャンペーンも全くななく？実効性ある避難計画もなく？過酷事故なら、偏西風で列島全体汚染されるのに？国も電力会社も責任とれず？廃棄物は処理できず？夏冬ピーク以外は発電電力余るのに？福島事故も汚染も解決せず？



年間電力消費量推移



残暑お見舞い申し上げます  
 今年は戦後七十年の節目。お参り先でも終戦前後の体験や、涙流されたりのお話もありました。戦争は多くの人人生に過酷な試練をもたらし、今その影響の中に意外とあると感じます。  
 同様、震災と原発事故が、福島県や北関東の子どもたちへかけ続けている負荷の深刻さは、まずはかり知れませぬ。ともあれ、今夏も二名の参加者と無事に保養キャンプを終えることができました。詳細は次号。(S)



ご質問、ご感想、投稿も大歓迎！